

三文雑記

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-02-28 キーワード: 作成者: 細井, 幸兵衛 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/00065309

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



ラジロガシ十、キジヨラン十、テイカカズラ十、サネカズラ十、イヌシデ十、エンコウカエデ十、イロハモミジ十、ケクロモジ十、サンショウ十、ウリノキ十、ツタ十、ジャノヒゲ十、ツルニガクサ十、ホウチヤクソウ十、オニドコロ十、クマワラビ十、ベニシダ十、シノブ十、ヒメノキシノブ十

以上の様な構成を示しており、第1層のスギは恐らく植栽によるものと考えられ、アオガシ、アカガシ、ウラジロガシ等を主とし、下生はアオキが最も多く灌木層は密閉されている。地表層は稚樹と草本が疎生する。地表にはこれらの落葉が相応堆積して湿っている。土壌は褐色の壤土で湿潤PHは5.7であつた。斯様な環境は紀州のコオロギラン自生地と類似した様相を呈していると思惟される。

更に同日他の一ヶ所でコオロギランを採集した。即ち杉原神社から安徳天皇御陵に登る道すじから少し入つた所で、海拔720m、環境はスギ無く、アカガシ、ウラジロガシ、アオガシ、イロハモミジ、サワグルミ等が第1層を占める所であるが、個体数は少く、且その後可成り伐採された為、今日尙発生しているか否か疑問である。

又最初の発見地といわれる安徳天皇御陵附近の植相は、第1層にアカガシが優占しウラジロガシを混じ、第2～第3層はサカキ、ヤブツバキ、イヌガシ、ハイノキ、シキミ、ヤブニツケイ、アオガシ等が多く、地表層はこれらの稚樹が疎生し、落葉が厚く堆積しており土壌はPH5.0～5.5を示していて相応湿潤である。

結局、以上の様に見ると横倉山に於けるコオロギランの発生地は海拔680～800mの地で照葉樹林の上部に位置し、林内で腐植質の堆積の多い湿潤且酸性に傾いた地であるといえる。

又気候的には此の生育地は北向で、冬季は可成りの積雪もある。1951年2月中旬に赴いた時は生育地附近で平均10cm内外の積雪を見た。

細井幸兵衛 ※ 三 文 雑 記

K. Hosoi : Miscellaneous Notes on Botany

△北の端、青森附近でも植物については、いささか変つたものの観察されることがある。

北陸とは、似たもの変つたものもあるかと思いますが、以下に少し許り気付いた事を書いてみる。

△青森市内の、とある路傍でハマビシ (*Tribulus terrestris* L.) を見つけた事がある。花も実も着いた一尺ほどの拡りのあるものであつたが、一株よりなかつた。どうして種子が運ばれて来たのか知らないが、珍しいのでお報せする。1948年9月13日の事

△エゾゴマナ (*Aster glehni* Fr. Schmidt) が八甲田山に産する事は余り知られていないのではないかと思う。機会を得て盛岡、岩手大学の標本を2時間許の間、見た事があつたがその時も北村博士の同定になるエゾゴマナがあつて、八甲田酸ヶ湯とあつた様に記憶している。私も同所附近で1949年7月27日に採つている。その他に本県で産する所を知らない。

※ 青森営林局林業試験場青森支場

△シロソバナ (*Adenophora remoniflora* Miq. f. *leucanthus* Honda) は、九州の肥前で見付かつたものだが、北の端、陸奥国にも産する。私は東津軽郡高田村で、1950年7月23日に一株採っている。母種の産する所にはどこでも出現する可能性はあるが、九州と青森一寸遠隔の地で面白いので報告する。序に述べれば、本品は母種の多数ある中であつて、萼片が少し大きい。

△コジャク (*Anthriscus sylvestris* Hoffm) の変化の多い事は、原寛先生の書かれている如くでありませうが、〔東大理紀：VI 90 (1952)〕青森附近では、茎葉に於ける毛の多少、実の剛毛の有無、度合等の変化は同一場所でさえも観られ、それ等の様々な変化のある個体が、互に隣接して生育しているのが観察される。

△オキナグサ (*Pulsatilla cernua* Spreng.) は衆知の野草であるが、いつぞやあの花波の数を算えてみた事がある。そしたら六片のものと七片のものが相半ばして群生しているのに気付いた。其後も時折、別の場所で調べてみたが矢張、同じ結果を得た。これは、どちらの数が基本なのか判然としない位だつた。尤も大抵のもの本には、六片と明記してあるが……。

各地のものについて、多数の群落を観察してみなければ、何とも云えないが、以上私が青森附近で観察した結果である。

△コハマナシ (*Rosa yezoensis* Makino) は、ハマナシとノイバラの中間種であるから、今までは大抵海岸のハマナシのある近くに来る様で、多くは海岸附近で採集されている。この場合は、ハマナシの群落中にノイバラが混入する事によつてその条件が生じたのである。ところで又、この反対の場合もあり得る。

青森附近の山、殊に八甲田山麓には、偶々ハマナシの生えているのを見る。私は、青森を離るる約8 km、海拔高250~300mほどの山中陽光の低い灌木原中に四、五株、コハマナシが群生しているのを採集した事がある。勿論その附近には、少数のハマナシもみられた。この場合は、丁度その逆の場合の環境の出来方とも言えよう。斯の如く、青森県ではハマナシは必ずしも海岸にのみ生ぜず、山中陽光の地に見付かる時がままある。八甲田谷地にても採集されているし、私も酸ヶ湯でみた事があつたが、その後、酸ヶ湯附近ではついぞ見掛けなくなつた。尙当地のノイバラは、花の大小、花色の濃淡、花梗、葉柄等の腺毛の有無、多少、刺の多少等にも甚だ変化があり、時には無刺のトゲナシノイバラもみられる。

△ヒダカノリウツギ (*Hydrangea paniculata* Sieb. et Zucc. var. *debilis* Nakai) は、不登花のない一型であるが、私はこれに相当するものをエゾゴマナと同じ日の1949年7月27日、八甲田山中の八甲田酸ヶ湯温泉新湯で見出した。概地は温泉が湧出していて、此処の本種は、温泉の流れに沿つて生じている。その為か、不登花は総べて狭くなつていて、時には不登花を全く欠除している個体まで出現していた。処が、或る個体では、同一株上の一部の花序には、申訳の様に、狭く小さい不登花の着いているのもあつた。今年又、その株をみたら、以前より幾らか不登花の多い花序が出ているのに気がついた。今後も折があれば観察するが、兎に角、温泉の為の変な生理現象の現れと思う。尙、花序は高山に出るアジサイノリウツギ型である。

△ヒメガンクビ (*Carpesium rosulata* Miq.) は、どの辺が北限とされているか知らないが、本邦北部には殆んどない。然るに、所もあろうに、私は津軽半島の先端に近い東津軽郡今別村の国有林内で、1949年8月20日に採っている。同地のヒバ(ヒノキアスナロ)林中に設けられたスギ人工林(50年生位)中で、同じ林内には、ナツエビネ、ムラキラン、アヲフタバラン、オホヤマサギサウ、コバノトンボサウ、キンセイラン等のラン科植物があつた。蓋し此処がヒメガンクビの北限と思う。又ムラキラン (*Vexillabium borealis* F. Maekawa) の北限であり同時にハクウンラン属の北限でもあろうと考える。

△大正七年に発刊になつた前田曙山氏の「趣味の野草」と云うのがある。そのアヅマギクの項に、「此花の間に、自ら画中の人物となりて彷徨すると、時に白花の品に逢著する。白花は紫花よりも更に清麗にして、浄き事真珠の如く、移して螺鈿壇上の珍とすべきで有る。」の一節がある。

嘗つて岩手県岩手郡の雫石町で1949年5月31日この品を得た。其後、当地でも沢山のアヅマギクをみたが、再びこんな白花品に遭遇する事が出来なかつた。紫花品には、ごく淡い色で殆んど純白に近いものまであるが、本当の純白色品は余りないらしい。これがシロバナアヅマギク (*Erigeron Thunbergii* A. Gray var. *leucanthum* Hara) である。

△シロソバナの様に、九州で発見され、その後、何処からも見出された報告のない変り種で、北の端青森県にあるものをも一つ報告する。これも上記雫石町で採つたものである。田圃の畔や溝にサハヲグルマが、沢山あつたので、何気なく一番手近のものを見たら、何と白綿毛のない裸のサハヲグルマであつた。暫く探してみたが、その他にはついに見付らなかつた。そのただ一本を後生大事に標本としたのであるが、花部に少し虫害を被つた。これが1949年5月28日の事であるから、大体一年前に九州の日向で採集されたアヲサハヲグルマ (*Senecio Pierotii* Miq. var. *glabrescens* Nakai) が丁度これに相当する事がわかつた。

堀場治良 石川県鳳至郡町野町曾々木神社ケヤキ・ヤブニツケイ 群叢の観察

J. Horiba : On the Vegetation of Sosogi Shrine, Hugesi-Gun, Isikawa-Ken.

輪島より東北へ五里で至る曾々木神社の群叢は能登半島に於ける常緑潤葉樹帯に在り固有植相をもつているので、これを統計整理した。

次の第一表に示された如くケヤキ・ヤブニツケイ群叢と云えると思う。上層はケヤキ、シロダモ、ヤブニツケイが優位を占めているが直径1.5mもある2本のタブノキは枝落ち、葉も減少し老年期の植生であり過去の盛であつた姿を偲ばせる。この階層のもので見られてもよいと思われるトベラ及シイがなく、一方林套の処々にイタヤカエデの在ることが特筆すべきかと思う。

中層ではヤブツバキが優占種でありヤブニツケイ、シロダモが混生している。ヤブツバキは上層の被度の弱い処又は林套に連鎖状に植生し林外からの太陽直射光線をさえぎっているかのようである。